

## もう一度、揺れ動いて

桜を見て、きれいと感じるときもあれば、切なくて涙が出るときもある。そんなふうに、何かを見たり、体験したりして、心が揺れ動いたとき、「ああ、見た」と、思うんです。去年、隅田川の川沿いに咲く桜を見たとき、自分が花を見ているのではなく、まるで花に見られている、そんなふうに感じて。でも、その桜を丁寧に写生しても、その時感じたものとは全く別のものになってしまう。そこで、自分がその桜から感じた感動や感情をぶつけるように、布に絵の具を垂らしたり、染み込ませていきました。そうすることで、桜の表情と、その桜を見たときの私の感覚とが重なり合った。私は花そのものではなく、自分がそれを「見た」ときの、衝動や突き動かされた感覚を描いていきたい。それを描くこと



「桜ドロップス」2006年 (h.250×w.110cm×4枚)



「観察ノート」2005年 (h.38×w.29.5×d.2cm)  
使用済の紙パレットをカラーージュして。

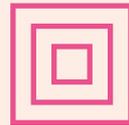
で、衝動をもう一度味わいたい、そう思っています。

布は一反で買って、描いては巻き、時に、途中で切って、という作業を繰り返していきます。同じ絵の具を使っても、自分の体調によってその散らし方は変わってくるし、また湿度や天気によっても、布への染み込み方は違うので、当然、自分の気に入らない部分も出てくる。でも、それは「日記」みたいなものだとして受け入れていま



「site/sight」2003年

## プランツ・プランツ・ギャラリー Plants Plants Gallery



28

黒嶋亮子 [美術家]

何かを「見て」、揺さぶられた感情。黒嶋さんは、絵を描くことで、その感情を追体験する。そのシーンを呼び起こした、彼女の手から放たれた絵の具は、布に思い思いに散り、どこまでも鮮やかに広がっていく。

す。その展示の仕方も、布の向こう側に人がいれば、ひゅると布が揺れたり、作品自体も変わって見えるというもの。そんな“変化”のある形状が、自分にとって、リアリティが感じられて、好きなんです。植物の、咲いてはやがて枯れ、なくなり、そして来年になると再び花開く、そういった“変化”にも魅力を感じています。植物のそんな生命力に影響されて、絵の具を溶いた、使用済みの紙パレットを切り抜いて、それをカラーージュしたりして。それは、作品が完成しても終わりではなく、その制作に使ったものでも、もう一度花を咲かせられるような気がしたんです。

私が自由に「見て」、何かを感じ取るように、作品を見てくれた人にも、また自由に「見て」、そして何かを感じてもらえれば、そう思っています。(黒嶋亮子/談)



黒嶋亮子 [くろしまりょうこ]

1975年 東京生まれ  
2000年 多摩美術大学絵画科油画専攻卒業  
2001年 多摩美術大学大学院美術研究科  
絵画専攻修了

個展

2000年 「in the room」(トキ・アーツスペース・東京)  
2001年 「限りなく近い風景」  
(—GALLERY EXPECTS—フタバ画廊・東京)  
2002年 「SKETCH」(西瓜糖・東京)  
「素描の部屋」画廊企画(トキ・アーツスペース・東京)  
2003年 「site/sight」(ART SPACE LAVATORY・東京)  
「フルカラー」画廊企画(トキ・アーツスペース・東京)  
2004年 「写生/画」画廊企画(トキ・アーツスペース・東京)  
2005年 「観察ノート」2006年企画シリーズ“Painters”  
—vol.1 絵とする事実(トキ・アーツスペース・東京)

賞受賞

1999年 「第4回ART公募2000」入選  
2002年 「第17回ホルベイン・スカラシップ」奨学者認定  
2003年 「公募展 美術誕生」入選



「排泄」する場所のトイレと、「増幅」する蔓という  
対比におもしろさを感じて。蔓がちょっとずつ伸びて  
いく感覚で、鉛筆を走らせていく。